＃２「みんなの居場所　ひなたぼっこ」（群馬県高崎市）

１．概要

運営主体	虹の架け橋		
所在地	群馬県高崎市	人口規模*	369,688 人（R4.3.31 現在）
（活動範囲）	高崎市新町地区	（活動範囲）	11,892 人（R4.3.31 現在）
活動拠点の種類	空き店舗（商店街の時計屋さんの旧店舗兼住まい）		
活動開始年	2019（H31）年		
活動概要	・代表者がヘルパーをしている中で感じていた、「どこか集まってみなで話す場が必要だ」という思いを実現した、小学生から高齢者、外国にルーツのある子どもまで、いつでもだれでもきていい、安心して話ができる・聴ける居場所。日時によって、「セルフカフェ」「赤ちゃんくらぶ」「まなびば」などのプログラムを実施。		
対応する地域課題	地域のつながりの希薄化　など 世帯が抱える課題の複雑化・複合化 医療・介護ニーズの増加地 地域経済活動の縮小（雇用の場不足、空き店舗増加等）		

*人口出典：高崎市ホームページ「人口及び世帯数」 https://www.city.takasaki.gunma.jp/docs/2013121100182/

２．活動の展開プロセス

■地域の状況

・合併前の旧新町の関係性が強く残っている地域。かつての新町は商業の町。拠点がある場所は、新町の中でも「銀座通り」と言われ、小さな商店がたくさん並んでいたが、現在は真っ暗な通りになってしまっていた。各地区で月１回のサロンは行っているものの、それ以外の活動はあまりない状況だった。

■活動者の思い、バックグラウンド

・代表がヘルパーとして仕事をしていく中で、独居の方が多いこと、家族と同居していても大変な方が少なくないことがみえてきた。そうした方の場合、通いの場等を利用すれば行政や介護保険等の支援まで至らない方も多くいることが分かった。

・代表は以前から日本語教室とも関わりがあり、その中で、外国人で、言葉以外の、生活に根差した悩みを抱えている方もいることが分かっていた。これらの経験から、代表者には、「集まってみなで話す場が必要だ」という思いがあった。

・虹の架け橋という団体名の由来は、「だれかのかけはしになれたら」という思い。高齢者だけでなく、弱い立場にある方、子どもや障害者の方々は、もっともっと言いたいことがある。「駄目だよ」と言われたら諦め

ないといけない。そうしたことが少しでも少なくなるように、行政をはじめとするいろいろなところにつなげていければよい。

■活動拠点の確保

～賑わいのあった商店街の空き店舗を使いたい！地道に大家さんの理解を得る

・ 場所は、商店街の空き店舗（元時計屋さん）を使わせてもらおうと決めたものの、大家さんは「あそこは潰すんだから」とつれない。活動自体にも疑心暗鬼だった。

・ 大家さん説得のため、県社協や共同募金にも相談したという行政機関等とのつながりを地道に説明。1 年半かけて場所を確保することができた。店舗は 2 階まで改築し、みなが利用できるスペースを作った。

拠点確保に際して、助かった支援 POINT

社協支所職員からは、県共募（赤い羽根共同募金）の紹介等を得た。
高崎市からは、市建築住宅課の空き家対策事業（改修費）の適用を受けた。

■活動を続けるための体制づくり～参加者の張り合いづくり

・ ひなたぼっこは、「自分はこれができる」ということを発揮できるところと位置づけている。参加者が「自分はこういうことができる」と提案してくれたことを、次回の集まりで実行。提案を実現するためにはどうすればよいかも参加者同士で考えてもらう。例えば「次は書道をしよう」と決まったら、必要な道具の調達をどうするかということから考える。

・ 自分たちで次回の活動内容を決めることで、それを楽しみに次回も参加する。自分たちで決めることが、張り合いにつながっている。

・ 実施しているプログラムは下記の通り。

・「セルフカフェ」　主に高齢者向けの居場所　…週２回（月、木　午前）
　木曜日は、一人暮らしの高齢者を対象に。あんしんセンターと連携

・「赤ちゃんくらぶ」　未就学児と母親が集う居場所…週１回（木）

・「まなびば」　放課後の小学生向け、大学生が宿題等見守り…週２回

※その他「親子日本語教室」 現在はリモートのため実施なし

・ 上記のほか「自主勉くらぶ」

・塾へ行かない子供たちを対象に上武大学の先生と学生数名がボランティアで勉強を見てくれる。（現在はコロナのため大学生含め限られた方のみ参加）

・ずっと来ている小学生は 2～3 人。学校との連絡も密にしながら実施。

・ それ以外の曜日も居場所はあけている。例えば火曜 15 時ぐらいから 1 人で開けていると、買い物帰りの方がふらっと立ち寄ってくれる、といった利用のされ方。

・ 活動メンバーは総勢で 8 名。中には、元々町にあった日本語教室の方も複数いる。スタッフは常時 3 人いるが、多ければ 6 人ぐらい。

参加者のはりあいや意欲を高める！ POINT

活動メニューは参加者 1 人ひとりの「できること」から考え、
やり方を皆で工夫して実践していく。

■活動資金の確保

～拠点の管理運営にかかる費用として、市の家賃補助制度を活用

・ 空家活用に際しては、地区社協から市建築住宅課の空き家対策事業についての情報提供を受けた。市から家賃補助を受けるには、「1 年間誰も住んでいない物件」であることが条件なのだが、ちょうど申請するタイミングが、時計屋さんが空き店舗になってから 1 年経過したため、補助を受けられた。

・ 不動産屋さんを通して物件を借りると、2 年ごとに更新料がかかる。とにかく持ち合わせがない状態で活動を始めたが、県の共同募金担当者には「やりたい人がお金を出すのは当たり前」という言葉をかけられた。それぐらいの気持ちがなければ、やっていけないというのは事実かと思う。

拠点の家賃も市の空き家対策事業から POINT

社協支所職員の紹介により、市建築課の空き家対策事業の適用を受けることができた。

■地域の理解を得る

・ 活動を展開している地域は非常に住民同士の関係が近く、つながりが強いところ。それがよく作用することも、悪く作用することもある。

～改築工事にあたっての近隣への配慮のアドバイス

・ 活用した空き店舗は道路に面しているので、トラックが止まると人が動けなくなる。店の改築をしてくれた方が商工会にも詳しく、先に工事を始めることを言っておいて、オープンすることも謳ってしまった方が信用されるのではないかという助言もいただき、隣近所と周辺区の区長にお知らせをした

～地道に足元を固めていく

・ 活動拠点として空き店舗を借りたものの、「怪しい団体だ」、「税金の無駄遣い」とまで言われた。

・ 学習塾の先生をしている仲間からも、「地道にやっていくしかない」という助言を受け、「根気強く活動を続けて、足元を固めていかなければならない」と決意した。その後、拠点の所有者からは「ずいぶん、いいとこになったねえ」と言われるようになった。

地域の理解促進に向けて　助けられた！ POINT

改修を担当してくれた地元業者さんが商工会に詳しく、「近隣の人に、工事と拠点開設のお知らせをした方がよい」との助言を受け、事前に近隣の区長への挨拶回りを実施した。
社協支所職員より、各地区の民生委員の紹介を受け、役員等への周知を図った。
高崎市の広報誌で活動紹介してくれた。

～中には、家族からの反対も….

・「なんであんな所に行くの」と、同居の家族から言われる高齢者、保護者から言われる子どもなど、中には家族の反対で通えなくなってしまう人もいた。

・ 学校で時間いっぱいがんばった後、ひなたぼっこに来て肩の力が抜けたように一息つく小学生の子ども。また、行き場がなくなってしまうおばあちゃんたちのことを考えると、辛い。何かにつながっていたい人は多いと思う。そうした意味で、安心できる場、心の拠り所でありたいと願う。

地域の理解促進に向けて POINT

ご本人たちにとっては「拠り所」なのだが、中には、家族からの反対で
通えなくなってしまう人もいた。
ご本人にとってはつらいことなので、１人が１人を呼ぶ
地道な活動を展開していくことが大切。
支援が必要な場合、個人情報保護の問題もあり、誰に情報をつなげることが適切なのか、
検討や判断が必要な場合もある。

■目指す活動の方向性と課題

・ 元々、どなたでも来てもらってよいコンセプト。みんなの居場所。「大変なんだけどどうしたらいいんだろう」ということが気軽に言えるようになればもっといい。居場所がなければ、それを言ってくれるチャンスはない。
・何かあった時に、助けて下さいと言えるところになればいいと思う。問題自体は個人のことだが、その人だけの問題ではないよね、ということが見えてくる。
・市域というよりも、地元密着で地域のボランティア団体と連携し、情報交換はこまめにしたい。
・無償の活動団体として、参加費の徴収等をどのように考えるか、活動から発見した新たなニーズをどのように適切につなげていけばよいか等は今後の課題。

■自治体、社協等へ

・ 行政には必ず一線があり、それを崩すわけにはいかない。受け入れ側の気持ち次第の部分もある。何かを求めるということではなく、どういう形でお話を行政に持っていけるかということの方が問題であるように思っている。（本当に微妙なところなので、そうなると本人と行政ではなく、地域のおせっかいなおばちゃんがワンクッション入り、気持ちをほぐしながらつなげていくのがベストかなと思う。

今後に向けて POINT

何かあった時に、助けて下さいと言えるところになればいいと思う。
そのためには、小さなことでも橋渡しができるスタッフが多くなれば、と思う。
その先に行政や社協という、公的機関があり、そこにつなげられる。
最終的に助け船が出せるというのが、大切なことなのではないか。
日本人も外国人も関係なく、「世の中捨てたもんじゃないね」
「年をとっても希望がもてるね」という若い人が１人でも増えてくれたら嬉しい。

活動団体の情報	虹の架け橋 〒370-1301　高崎市新町 2848